

石平 暖佳

ISHIHIRA HARUKA



【第1回事前研修】

東京大空襲について話して下さった方のように、私も多くの人に平和や戦争について伝えていきたいと思いました。

また、伝えて終わりではなく、考えさせることも大切だと知り、私たちも知るだけでなく考えることが大切だと感じました。

今まで、沖縄や広島に行ったときは、ただ漠然と「語り継ぐ」としか思っていなかったが、将来のことを見据えてこれから学びたいです。



【第2回事前研修】

実際に戦争を体験した方々の言葉は重みが違うなと感じました。

体中に虫がわいたり、食べるものがなかったり、知識はあったけど、生々しさがあって怖かったです。

「選挙に行って欲しい」「語学を学んで世界がどうなっているのか知る力を持ってほしい」という言葉を何度も言われ、絶対に忘れたくないと思いました。

「語り継ぐ」のはもちろん、「二度と戦争を起こさない世界をつくる」ことも私たちの重要な役目だと思います。保育士として、将来何ができるか考えていきたいです。

【第3回事前研修】

学芸員の方が何度も「被害を受けたのは第五福竜丸だけじゃない」とおっしゃっていました。他の漁船やマーシャル諸島の人たちなど多くの方が汚染魚や放射線の被害を受けました。

展示館に行くまでは第五福竜丸の話しか知りませんでした。1度の実験でどれだけの被害をもたらしたのか、行かないと分からないことばかりでした。

核の威力についてだけでなく、人に向けて放ったものでなくても、人々から多くのものを奪うのだと改めて感じました。

【第4回事前研修】

昭和館は、日常生活の様子や、その変化についての展示が多く、戦争の長期化によって配給やご飯の量が少なくなっていたことが分かりました。

しょうけい館は、自分が戦地に行ったような展示や弾丸、制服などがそのままあって、前線の状況が分かりました。

特に野戦病院の展示は、足を引きずる人、麻酔なしで手術を受けてる人、ベッドで横たわる人など、リアルな模型でショックを受けました。



【第5回事前研修】

ウクライナの戦災者の方の話をきいて、戦争は遠いものではなく、いつ自分の身に起こるか分からないのだと実感しました。特に、逃げる過程での病気や子どもの話など、戦争がもたらす影響はとて大きいのだと分かりました。

戦災VRでは、ウクライナの惨状が目の前にあり、臨場感がありました。瓦礫が落ちそうな家、前方が崩れた飛行機などの写真を見たときは、また違った怖さがありました。



【結団式】「平和をつなぐ一員に」

結団式を終えて、これまでの研修を振り返りました。語り部の会の方やウクライナからの避難者の方との交流、様々な資料館の見学。たくさんの人たちが、戦争や平和について伝えています。

私もその一員になれるように、長崎派遣を通して、なぜ原爆を使ってはいけないのか、なぜ戦争をしてはいけないのか、もっともっと学びたいです。

当たり前じゃない今を守れるように、精一杯取り組みます。

【活動報告会】「知る機会を大切に」

この平和青年団の活動を通して感じたことは、「知る機会」の大切さです。事前研修で見学した、都立第五福竜丸展示館や昭和館、しょうけい館は身近にあるのに訪れたことがない場所でした。6月から始まった事前研修から8月の長崎研修までの2か月で戦争や原水爆への知識が増え、そこから考えさせられる平和や核兵器のあり方について、高校生という立場でもっと多くの人に伝えたいと考えるようになりました。そして、知る機会是他の人からもらうものではなく、自分から作るものだと感じさせられました。今回、平和青年団に参加したように自分から新たな知識や経験を増やさなければなりません。

知る機会と同じくらい大切だと感じたことが「体験」です。資料や写真を見ることはもちろん重要ですが、現地へ行き、五感で感じる事が一番の学びになります。長崎での平和関連施設を巡るフィールドワーク、青少年ピースフォーラムへの参加を通して被爆者の方の話を聞いたこと、被爆した建造物を見たこと、同年代の人たちと平和について話し合ったこと。長崎で経験した全てが私の中で貴重な体験になりました。

最後に、「長崎を最後の被爆地にするために。」平和祈念式典での長崎市長による平和宣言の中で一番強く心に響いた言葉です。私は将来、子どもと関わる職業に就きたいと思っています。これから関わる子どもたちが大人になった時、世界から核兵器がなくなり、本当の意味で長崎が「変わる事のない最後の被爆地」になっているように多くの人にこの経験について伝え、未来の子どもたちに知る機会を作りたいです。そして、知って終わりではなく、平和のために自分には何が出来るかを考えてもらえるような伝え方をこれから探していきたいです。



市橋 真直

ICHIHASHI MANAHO



【第1回事前研修】

学芸員の方のお話は最初の方しか聞くことができませんでしたが、やはり東京も空襲などで大変な目にあった人たちが大勢いた、ということに改めて気が付きました。

日本は唯一の被爆国で、原爆の恐ろしさはよく聞きますが、今、私たちが住んでいるこの東京の地が、戦争中の人々が空襲で逃げまどい、家を焼かれて怖くて悲しい思いをした場所であるということを東京大空襲のお話を聞きながら実感し、胸が締め付けられる思いがしました。



【第3回事前研修】

都立第五福竜丸事件の事は、中学校の時に歴史の授業で学びましたが、久保山さんのお話や、原水爆禁止の請願書のお話は初めて聞きました。

吉永小百合さんも毎朝ラジオを聴きながら心配されていたお一人で、だから今、朗読の活動をされていることを聞き、今生きている人が子どもの時の本当のことだったのだなと思いました。

請願書は、誰が先導するでもなく、たくさんの人が自然行動した話を聞き、その時の情熱をそのままずっと人々が持ち続けることは、とても難しいことなのだなと感じました。

【第4回事前研修】

しょうけい館では、『ゲゲゲの鬼太郎』を描いた水木しげるさんが夫妻で戦争体験を語る対談の映像を見ました。水木さんが戦争で片手を失い、怖い世界をみて、妖怪のことを描きだしたそうです。

水木さんからしたら、怖い戦争を怖い妖怪を通じて表すことをするようになったのかもかもしれません。

【第5回事前研修】

私たちはウクライナ人のオルガさんという女性からお話を伺いました。私は、今、戦争をしている国の人と会うのは初めての経験でした。今、ウクライナでは、地上で生活をすると危ないので、子どもたちが学べるように地下に学校を作り、学んだり遊んだりしているそうです。

ウクライナとロシアの戦争が始まるまで、ウクライナという国があること自体が知られていなかったと思うので、ウクライナという国のことをもっと知ってほしいとおっしゃっていました。



【結団式】「戦争の恐ろしさを次の世代に伝えるためには」

研修中は長崎の学生と交流する機会がたくさんあると思うので、どのようにして次の世代に戦争の恐ろしさを伝えていくかをディスカッションしていきたいなと思います。

私を含め、みんなにもっと戦争の恐ろしさや平和の大切さを伝えられるように長崎で学びたいと思います。



【活動報告会】「私たちの代でも戦争の恐ろしさを伝えたい」

戦争を実体験された方や、被爆者の方々が減っていています。私たちはどのようにして、私たちより小さな後輩たちに私たちに語っていただいた貴重な体験を伝えていけばよいのか、ということに改めてこの研修中に考えました。私は今回の研修で、戦争の事実を伝えていくことに2つの困難があることに気づきました。

1つ目は、より具体的に現実感をもって自分の体験を語る方が減っていくという事実です。私たちは事前研修で色々な平和に関する資料館に行き、沢山の写真や映像を見たり、学芸員さんから説明を聞いたり、実体験をされた方からの話を伺い、それぞれにたくさんの物語と想いが込められていることを知りました。

やはり、教科書で読むだけではないリアルを知るためには、実体験をされた方のお話しは現実感を伴いました。

2つ目は、長崎の高校生とお話をしたとき、戦争の伝え方にも賛否両論があることを初めて知りました。戦争の恐ろしさやグロテスクな面を伝える写真や絵を見せると、子どもがトラウマを受ける可能性があるからやめて欲しいという意見も最近増えてきたそうです。確かに、戦争反対のメッセージが残らずに、強烈な映像のみが子どもの記憶に残ってしまうのは本末転倒なので、あまり良い方法ではないのかもしれません。ですが、実は私も初めて戦争が恐ろしいと思ったきっかけは、ドロドロとした血が背中に付いた一枚の写真でした。私はそれから、戦争というワードがつくことは全部一生懸命聞くようになり、私の中に戦争についての情報が追加されるたびに色々なことがつながり、考えも深くなっていったと思います。この経験がなければ戦争に対して「ああ、怖い戦いなんだね」という意見しか持たなかったと思います。

私たちの代でも全員が戦争について関心があるわけではないし、戦争にまつわる様々な思想や意見があることもわかってきました。しかし、自分の家族が死んだり、自分の友達が死んでいいと思う人は決していないと思います。だから、絶対に戦争を繰り返さないためにも、戦争の恐ろしさを伝えなければいけないと私は思います。

貴重なお話を聞かせてくださった体験者の方、熱心に説明してくださった資料館の方、みんなをまとめてサポートしてくださった港区の方、一緒にお話をしてくれてこの夏を共に過ごした友達、どうもありがとうございました。



稲井 琉楓

INAI RUKA



【第1回事前研修】

私は疎開について、大人たちは子どもたちの安全を守るためではなく、「足手まとい」だからという理由で疎開させたということを聞いて、今では考えられない異常な行動だったということを知りました。

また、戦争で家族が離れ離れになるのがどんなに心細いものか、戦争はこんなにも人を苦しめるものだったのかということを改めて実感しました。



【第2回事前研修】

今回は語り部の会の方々に、戦争体験者の話を聞くことのできる貴重な交流会でした。人は食べ物を十分に取らないと、人が変わったかのように普段であったら食べないものを食べてしまうことを知りました。食べ物が豊富な今は、本当は当たり前ではないことを念頭に置き過ぎていきたいです。

語り部の会の方々がおっしゃっていた通り、小さな戦争でも起きたら反対することを忘れないようにしたいです。

【第3回事前研修】

ワークショップに参加して、もう二度と同じことを繰り返さないで欲しいという思いのおかげで、私たちは今多くの証言、残されたものを見たり聞いたりすることができています。

それらの証言を自ら音読することで、小さな子どもでも戦争の知識を持っていたこと、被爆者の方が何を見て、どんな気持ちだったのかということを感じました。

私は証言者として話すことは出来ませんが、悲惨な出来事を忘れないということが大事だと思います。

【第4回事前研修】

戦時中の医療を再現したジオラマを見ました。兵士たちが怪我をした時、麻酔なしで手術しているのを見て、彼らの表情から手術をする人も受ける人も苦しかったということを怖いという言葉では言い表せない気持ちを抱きました。

医療品がなく必死に戦った兵士を助けたくても助けられない衛生兵、苦しい状況の中で我慢するしかなかった兵士、「どうすることもできなかった」その辛さを感じました。



【結団式】「平和への想いを胸に」

結団式で清家区長から長崎派遣決定書をいただき、平和青年団の一員だということを改めて感じました。

青年団員の応募のきっかけは人それぞれでしたが、平和への想いや平和学習への意欲はみんな同じということを知りました。

このメンバーで長崎での学習を充実したものにしたいです。そして、派遣研修後も自分の中にとどめておくのではなく、様々な人に伝えていきたいです。



【活動報告会】「過去から学び、未来を守る」

長崎へ実際に訪れることで、目で見て、耳で聞いて、体で感じるものがありました。原爆資料館では、被爆した人々の写真や遺品、被爆当時の街の様子などが展示されており、どれも目を背けたくくなるような現実がそこにはありました。特に、家族を失った人の証言には胸が締め付けられる思いがしました。

そして被爆された方のお話を伺いました。被爆したからといって差別を受けてしまったり、被爆したことを隠さないといけなかったり、戦争が終わった後も人々の生活は苦しかったそうです。戦争が一人一人の人生にどれほど深い傷を残すのかを実感しました。

戦争や核兵器はただ歴史上の出来事ではなく、今もなお続いている「生きた記憶」なのだと感じました。

また、私は昨年広島を訪れました。今回の青年団の活動を踏まえ、広島と長崎、この二つの都市に共通することは、「核兵器の恐ろしさ」「命の重み」を未来に伝えようとする強い意志があることです。私たちは、過去の過ちから学び、同じ悲劇を繰り返さない努力を続けなければなりません。

戦争を知らない世代が増えていく今だからこそ、被爆の実相を語り継ぎ、平和がどんなに素晴らしいものなのかを伝えていくことが必要です。

事前研修や長崎で学んだことを、「悲しみ」だけで終わらせるのではなく、伝えていく、行動に移していくことが、未来を生きる私たちの責任だと思います。一人一人の意識が変わることで、世界は少しずつでも確実に変化していけるはずで、日常の中で平和を意識し、自分にできる小さな行動を続けていくことが未来を変える一歩になると私は信じています。



内山 葵

UCHIYAMA AOI



【第1回事前研修】

私達が生まれてくることができたのは、80年前、戦時中に生き延びた人達から命を受け継いだからです。

戦時中は人権侵害が普通にあり、特に障害者は戦力外であるため、疎開に行くことができなかったということに胸が締めつけられました。

被害の大きい爆弾を使って敵を苦しめていたそうです。被害を受けた場所によって、国からの補償があるか、ないかで分かれたことは犠牲者にとって受け入れがたいものであると思います。



【第2回事前研修】

語り部の会の泉さん達の話から、とても学ぶことができました。

B29が超低空で飛んできて、落とされた焼夷弾のせいで火があちこちから出て、煙の中、火の中を無我無我夢中で走り続けているから他人のことも考えられなかったことや、ご自身の父が行方不明になって家族と探しに行ったとき、焼けこげて亡くなっている父を見たくないけれど、探して見つけたいという矛盾した気持ちを持っていたと聞いて、胸が締め付けられる思いをしました。

【第3回事前研修】

展示室に入った瞬間の静寂とともに、被爆の悲劇や乗組員たちが受けた苦しみがじわじわと胸に迫ってくる感じがしました。

特に久保山さんの遺影は平和の尊さ、命の重さを改めて考えさせられるものでした。

展示されている当時の新聞や写真が非常にリアルでした。

【第4回事前研修】

昭和館では、防空壕の中を体験できる場所があり、その中がとても真っ暗で怖かったため、耳を塞いでしまいました。

各地域の空襲被害の写真を見ていると、閲覧注意の写真がありました。それを見た瞬間とても怖く感じ、特に広島の写真は直視できませんでした。

でも、その光景を本当に見た人のことを考えると私もしっかり見なければいけないという気持ちになりました。

【第5回事前研修】

実際に戦争から逃れてきた方の言葉には現実の重みがありました。大切な家族と離れること、避難先での不安、精神状態を悪化させたことなどを聞き、私にとってとても想像できないような体験ばかりでした。

私達が当たり前のように過ごしている日常、例えば家族全員で食事をしたり、安全な場所で眠れたりすることは本当に当たり前ではなく、とてもありがたいことなのだなど実感しました。



そして、自分の生活がどれだけ恵まれているのかを改めて考えるきっかけになったと思います。

【結団式】「平和のバトンを受け取って」

結団式に参加し、私は改めて「平和青年団員」として長崎に行く意味の重さを実感しました。先輩方がこれまで積み重ねてこられた活動や想いを含め、私たちが「平和のバトン」をしっかりと受け継ぎ、次の世代へ繋げていく責任があることを強く感じました。



被爆の記憶が風化しつつある今だからこそ、現地で自らの目で見、耳で聞き、心で感じたことを自分の言葉で伝えていくことが求められていると感じています。平和は「当たり前」でなく、「守り築き続けていく」ものであることを意識しながら、自分に何ができるのかを真剣に考え、行動していきたいと思っています。

この結団式は、単なる出発の場ではなく、平和を築く一歩です。長崎では真摯な姿勢で学び、未来への希望となるようなメッセージを発信していけるよう努力します。

【活動報告会】「戦争の記憶と今を繋ぐ架け橋として」

私は6回の事前研修と被爆地・長崎での派遣研修で多くのことを学びました。

事前研修では、ウクライナから避難された方や日本の戦争体験者の話を聞く機会がありました。どの話にも共通していたのは、戦争によって突然日常が奪われ、大切な人と引き裂かれる現実でした。『昨日まで当たり前だった生活が一夜で崩れた』という港区の戦争体験者の方の言葉が忘れられないです。

平和青年団の団員として長崎の平和祈念式典に参加し、改めて『平和』とは何かを深く考える機会となりました。式典の静寂の中、被爆者の方々の思いが込められた言葉や祈りに触れ、戦争がもたらす悲惨さを肌で感じました。また、小学校の5、6年生が合同で歌った「クスノキ」、被爆者の方の合唱「もう二度と」、高校生が歌った「千羽鶴」では感動し涙を流しました。原爆投下から80年の節目を迎えた今、過去の記憶を風化させず、次の世代へ語り継いでゆく責任を強く感じました。

長崎原爆資料館を訪れた際には、破壊された街の写真や遺品、被爆者の証言映像などを通して、原爆が一瞬にして人々の命や生活を奪った現実を突きつけられたように感じました。中でも、原爆によって体に大火傷を負いケロイドの状態になった写真を見たり、子どもの一部の頭蓋骨がごびり付いたヘルメットを見たりして、胸が締め付けられました。「こんなことが二度と起きてはならない」と心からそう思いました。

平和は当たり前ではありません。だからこそ過去の教訓を学び、現在起きている戦争にも目を向けることが大切だと痛感しました。平和青年団の一員として得た学びを、周囲に伝えていく使命が私たちにはあります。今後も平和について考え、行動し続ける人間でありたいです。



運天 美月

UNTEN MIZUKI



【第1回事前研修】

これほど悲劇的な戦争や空襲が、私達が生活している東京という地で起きたことを真正面から学び、知ることができる素晴らしい機会でした。学芸員の比江島さんからお話を聞くと、胸が詰まる思いで激しく揺さぶられてしまいました。二度と繰り返してはいけないとの思いを強く感じました。

しかしながら、現代の進向はあの時の過ちを悲惨な歴史を忘れ、戦うこと、強いこと、脅かすことが正義であるかのような道を進んでいるようで危機感を感じました。

比江島さんは関東大震災の後、治安維持法が作られ、言論統制などが強化され、中国との戦争、真珠湾攻撃、そして東京大空襲へとおっしゃっていました。

今また東日本大震災があり、秘密保護法が成立、中国を敵視するような空気が強くなり、憲法改悪、これを考えると、とても暗い気持ちになります。過ちを繰り返さないため、歴史を今一度学び直したいと思いました。



【第2回事前研修】

私が一番心に残ったお話は、学童疎開中に家族へお手紙を書く時、内容がネガティブなものだと検閲に引っかかってしまう話です。小さな子どもでも弱音を吐けなかった時代はどれだけ辛かっただろうと考えると涙がでます。子どもが子どもらしく生きられない時代は、子どもの純粋な心さえも殺す恐ろしい時代でした。

二つ目は、唯一の楽しみは夢の中で親と会えることだったという話です。私は毎日、家族と顔を合わせてどれだけ幸せなんだろうと実感しました。最近の子は、親を否定するような言葉を口にする子も多いですが、会えないことが一番の辛さであり、今の自分が恵まれているからこそ言える言葉だと思いました。

私も改めて、親と過ごせる時間に感謝します。

【第3回事前研修】

第五福竜丸が浴びた「死の灰」を見て、こんなにも小さくて何の変哲もない白い粉が、乗組員23名の命を危険にさらしたなんて本当に恐ろしい物だと思いました。ただ仕事で海へ出て、いつも通りの毎日が粉のせいで壊れてしまうなんて信じられません。

学芸員の方が言っていたのは、「第五福竜丸だけの事件ではない。他に近くにいた漁船のマグロ達も全てダメになって、日本ではマグロが食べられなかった。」とおっしゃっていました。第五福竜丸だけでなく、日本全てが死の灰でおかしくなっていました。平時にも一般市民を巻きこむ兵器の恐ろしさは一生忘れられません。

【第4回事前研修】

特に印象に残ったのは、しょうけい館で見た野戦病院の模型です。麻酔無しで手術をするという恐怖と痛みがとても考えられませんでした。今の医療技術は発展していますが、昔の医療技術は今とは比べものになりません。ましてや戦時中にこのようなことが起こるとは本当に残酷なことだと思いました。

私がここで日々の生活に恵まれていることや、医療設備が整っていることへの感謝、人々が必死に生きようとする力を感じました。特に人々が命を繋げようとする想い、人手不足が続く中、必死で命を救おうとする、繋げようとする熱い心に打たれました。



【結団式】「長崎への鎮魂棺」

私は、今年の三月に中学校を卒業しました。当時、学年主任の岡田先生が平和学習に力を入れて下さり、3年間を通して「戦争」「原爆」「平和」の三本柱で学習をし、その集大成として3年生の3月に生徒全員で原爆ドームを訪れました。今まで戦争の講話や写真を見るだけでも衝撃でしたが、実際の場所を訪れると、「この場で実際に起きたのだ」と戦争の悲惨さを実感し、「過去に遠いどこかで起きたこと」から、「いつか自分達にも起こり得ること。」に考えが変わりました。他人事から自分事に意識が変わった瞬間でした。



高校では平和学習がありません。中学校で学んだ平和学習の延長として、長崎で起きた原爆の爪痕を自分の目で見て感じ、平和への祈りを捧げ、その体験を港区の代表として伝えていきたいと思います。このような機会を与えてくださり、ありがとうございました。

【活動報告会】「被爆の記憶を未来へつなぐ ～長崎平和学習を通して～」

私たちは今回、長崎への平和学習を通して、原子爆弾がもたらした惨禍、そして平和の大切さについて深く学ぶことができました。実際に被爆地を訪れ、被爆者の証言に触れることで、教科書だけでは感じることのできない「戦争の現実」を肌で感じることができました。

1945年8月9日、長崎に投下された原子爆弾によって、数万人もの命が一瞬で奪われました。長崎原爆資料館では、焼け焦げた衣服や被爆した瓦、写真資料などを目にし、言葉を失いました。一発の爆弾が人間の営みをここまで破壊するのかと、強い衝撃を受けました。

また、被爆者の方の講話では、「家族を失った悲しみ」や「放射線障害との闘い」「社会からの差別」など、戦後の長い苦しみにについても語られていました。その姿からは、過去を語り継ぐ覚悟と、平和を願う強い意志を感じました。

私達は今回、長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典への参列という、人生の中で最初で最後であろう、新鮮な体験をさせて頂きました。プログラムの1番にあった、被爆者による合唱。それはものすごい迫力でした。被爆者による「もう二度と」の合唱。自分達が教科書やネットで見ただけじゃわからない、被爆者自身が歌っているからこそその歌詞の内容で、友達も仲間も原爆にやられ、今平和に生きている被爆者自身の生命の叫びを感じました。被爆者の方々のあの歌声は、今でも私の脳内に焼き付いています。また、原爆資料館では本物の資料を見る中で、自分の中では授業で学んだ歴史の一部であったものが、1人1人のご遺族の方々と繋がって、戦争の悲惨さが目の当たりになりました。原爆は、元々福岡県の小倉に落とす予定であり、天候の影響で長崎に変更になったそうです。そのような出来事を冷静に見れば、確かに天気で行けないから次の都市にという判断は現代の私たちからするとあまりに非人道的で、無差別的な大量殺戮としかいいようがありません。それを聞いた私は、ショックが止まりませんでした。生命をなんだと思っているのか。非常に納得がいきませんでした。このようなことから、戦争を行うと決めた政府、リーダー選びを間違えないこと、人を見る目を養うこと、も大事だと感じました。

最後に、戦争は過去に起きた出来事ではなく、現在進行形で続いていること。いつか私達にも起こり得ることを忘れてはいけません。私たちの身近にも迫っている恐怖を、未来への架け橋である、私たちが繋いで行く必要があります。世界中が平和であるために、日本全国はもちろん、国境を越えてまで伝えていくことが大切。と特に感じました。私は将来、国際的な関わりがある仕事につきたいと思っています。この経験を、世界中の人々に伝えていくことを、誓います。



金生ベカ 美愛

KANOBEKA MIA



【第3回事前研修】

ビキニ事件は、科学技術の進歩が救いではなく、破壊の象徴となった歴史の皮肉を突きつけていると思います。技術は使い次第で凶器となり、人間の倫理や判断が追いつかなければ悲劇を生む。未来においても同じ過ちを繰り返さないために、技術発展には責任ある態度と深い思考が不可欠だと痛感しました。



【第4回事前研修】

戦死者数ばかりが語られがちだが、戦中の具体的な痛みや状況は想像しにくい。

昭和館では模型や当時の音声が没入感を生み、戦争が遠い出来事ではないと実感しました。

しょうけい館では沖縄戦の傷や証言が生々しく示され、知らなかった現実を鮮明に理解できました。

【第5回事前研修】

ウクライナから避難してきたオルガさんの話を聞き、戦争で国を離れた人々が抱える現実を改めて考えさせられました。

日本に避難しても、文化や言語の違いから心身が疲れ、他国へ移ったり帰国したりする人もいるといいます。平和に慣れてきた自分の視野が揺さぶられ、迎える側として何ができるのか深く考える機会になりました。

【結団式】「結団式での気づき」

今日の結団式で、メンバーそれぞれが異なる視点や関心を持つことを知り、心強く感じました。

多様な考え方があるからこそ、一人では気づけない視点まで共有できると思います。

互いに刺激し合いながら、長崎でしっかり学び合いたいです。



【活動報告会】「平和を感じるということ」

港区平和青年団での活動を通じて、私は「平和」という言葉をこれまで以上に切実に受け止めるようになりました。6回にわたる事前研修では、原爆や核兵器廃絶に関する知識だけでなく、過去の戦争の歴史から現在の国際紛争まで幅広く学ぶ機会がありました。仲間と意見を交わすことで、単なる知識の習得にとどまらず、過去の出来事をどのように語り継ぎ、今の自分の生き方にどうつなげるかを考えるきっかけになりました。

特に印象に残っているのは、長崎で訪れた国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館の追悼の部屋です。そこには、亡くなった方々の名前が書かれた書物が静かに並んでいました。部屋に入った瞬間、空気が変わり、肩に何か重いものがのしかかったような感覚に襲われました。それは単なる感情の揺さぶりではなく、命の重さが直接私に迫ってくる体験でした。犠牲者の数を数字で理解するのではなく、一人ひとりに人生があり、叶わなかった未来があったことを痛感しました。その瞬間、平和とは「戦争がない状態」ではなく、失われた命を忘れず、今を生きる私たちがその記憶を未来にどうつなぐかにかかっているのだと感じました。

港区という多文化的な環境で仲間と議論してきた経験の重なり、平和は遠い問題ではなく、私たちの日常の中に根付いていることに気づきました。言葉の使い方や他者へのまなざし、小さな対話の積み重ねが、暴力や無関心に抗う力になると思います。長崎での体験は、過去と現在、そして未来をつなぐ「関係性」としての平和を教えてくれました。そして、その関係の一端を今この瞬間から私自身が担っていることを、静かに胸に刻んでいます。



岸 凛佳

KISHI RINKA



【第1回事前研修】

第1回事前研修では、同じく平和青年団の仲間と対面し、東京大空襲についての学習を行いました。同じ志をもった人たちなので、良い刺激をもらえたらと思います。

戦争に関する講習を受けたとき、何となく雰囲気では分かっていたなかった東京大空襲や原爆について、ようやく詳しく知ることができました。

集団疎開は、子どもだけは助けようとか、少しでも長生きして欲しいという配慮というか、親心かなと思っていたけれど、戦力の温存だとか、足手まといは地方へ!! というのを聞いてびっくりしました。しかも、障害のある人は別で教師が一生懸命に探すそうです。改めて、戦争をすると人の心に余裕がなくなってしまうし、相互監視や川に飛び込もうなど普段なら絶対に考えないことを考えてしまうのが、戦争って怖い…。と思いました。焼夷弾の話は、個人的にとっても興味深かったです。日本の家屋の構造を考慮して作られた爆弾で、観察力、考察力に驚きました。



【第2回事前研修】

今日、一番印象に残ってる言葉は、「戦争をしないために、まずは武器をもたないこと。あると使いたくなるのが人の性」です。しかし、2023年の防衛費の予算案は、6.8兆円でした。内容としては、自衛官の処遇対応と、反撃能力を行使するためのアメリカ巡航ミサイル「トマホーク」の取得や、国産ミサイル「12式地对艦誘導弾」などを取得のために、2.3兆～0.5兆円の増額が行われています。

友達と以前話したことがあります。「何故、防衛費をあげてるのか。」友達は、トランプさんがもう守らないかも～。とか言ってるからしょうがないと言っていたけれど、私は心残りがあってそうかなあと曖昧にしか返事ができませんでした。戦争を体験した人が減り、様々な意見、思想が失われているなど感じた一言でした。

また、井上さんのおっしゃっていた、辛いよりも怖いよりも、明日は自分かも。という想いが強かったとおっしゃっていて、聞かないと分からないことの体現のようだと思いました。

【第3回事前研修】

“人の想い”が、何か大きなものを動かすことがあります。第五福竜丸を含む、「ビキニ事件」もその大きな一例だと思います。特に、船が今もあのような形で残っていること、そして、署名活動を行っていること。この2つは大きな出来事で、日本人そして多くの偉大なる科学者たちの心を動かしたんだと思います。

私は、国境を越えて科学者たちが、核に対する宣告をしていたことが、一番驚きました。かつて、オッペンハイマーも、長崎・広島を経て核から身を引いたと映画内で言っていた気がします。いけないことなのだけど、想いが国境を越え、1つの同じ行動を導いていると思うと人の想いの素晴らしさに触られました。

【第4回事前研修】

戦傷病者のその後についてや、彼らの受けた対応など、全くの無知だったことについて知ることができました。

野戦病院で麻酔もない中、足や腕を切断されるのはその



人を助けるためには仕方のなかったこととはいえ、残酷だと思いました。

また、残された人たちの想いののった、千人針の布包帯の代わりをして使用するともあり、切なくなりました。

【第5回事前研修】

ロシア、ウクライナ戦争が激化するきっかけとなった、2024年2月24日朝5時。お母さんたちは、子どものためのお弁当を作ろうともう起床していたかもしれない。夜勤だった人は、あと数時間…と、もしくは、早朝から仕事や学校へ行こうとしていたかもしれない…。「今日、これ話そう。」と考えていたかもしれない。誕生日だった人もいるだろう。そんな“当たり前”の状況を壊して、得たものに何の価値があるのだろうか。

仲良くなれたはずのロシアの人とウクライナの人が戦争という一要因によって、仲良くなれなかったり、その国自体を憎むことになると思うと、戦争とは憎むべきものと思いました。

【結団式】「長崎研修に向けて」

私知っている原爆とは、1945年8月9日に落とされた、多くの人が犠牲になったという史実のみです。長崎で暮らす人々やそこで同じく平和学習を学習をする学生から感じる肌感覚や空気感を大切に、80年前に同じ場所で行ったということ意識して取り組もうと思います。

あの日、私の大好きな青い空は分厚い雲に覆われて、残酷な黒い雨を降らしました。

大好きで大切な青い空がこれからもずっと、青く輝くために私は自分で平和のためにできることを書き出し、まず身近な人から伝えていく、そのために今回、1つ1つのイベントに真摯に取り組めます。

【活動報告会】「記憶の空」

「Peace is a World Heritage to be shared by a humanity.」この言葉は私が長崎研修で心に残った言葉のひとつです。平和はみんなで考え守り続けなければ砕け散ってしまう儚いものであり、世界中全ての人々が、貧富の差や立場に関係なく得ることの出来るものです。「長崎を最後の被爆地に」という強い意志を今回の研修を通して身に染みて感じました。

青少年ピースフォーラムでの平和についての話し合いでは、「違いを知り、お互いを認め合う」といった身近で簡単な行動が、平和に繋がると気付きました。事前研修そして長崎での研修を通して、多くの同世代の方々とも意見を交わし、被爆者の方々から直接お話を伺う中で、今の「当たり前」が核兵器や戦争によって一瞬で奪われてしまう現実を強く意識しました。これは決して、他人事ではなく自分事として「いざという時を起こさないために」考えていく必要があると痛感しました。

1945年8月9日。私たちを見守る青い空にキノコ雲が立ちのぼり、命を育むはずの雨は黒く染まりました。その日、当たり前の日常は一瞬で奪われ、その脅威は80年経った今も続いています。命に替えはありません。自然災害は「いざという時に備える」ことしかできませんが、核戦争は「いざという時を起こさないために」行動することができます。

被爆の体験を持つ方から、直接お話を伺える機会は、年月を重ねる毎に減少していき、いずれは被爆者のいない時代が訪れます。それを避けることはできません。だからこそ、その日までに私たちは彼らから託された「平和の種」を咲かせ、平和を繋ぐために次の世代に渡さなければなりません。

二度と同じ過ちを繰り返さないために、知ってください。そして、忘れないでください。この日本で、私たちが生きるこの国で、かつて実際に起こった残酷な出来事を、原爆のことを。



木ノ原 もも

KINOHARA MOMO



【第1回事前研修】

第1回事前研修では、比江島さんから東京大空襲のお話を聞き、胸が締めつけられました。

火の海の中で逃げることも出来ず、消火をしなければならなかった人々がいた事実、戦争の非情さを痛感しました。

数字の裏に確かにあった一人ひとりの命。その重さを想像し、忘れずに語り継いでいきたいと強く思いました。



【第2回事前研修】

港区語り部の会の紙芝居や語りを通して、安全だと思っていた学童疎開の過酷な現実や、粉歯磨き粉で空腹をしのいだという体験に触れ、胸が締めつけられる思いがしました。

戦争の記憶から逃げず、言葉を通して世界と向き合う語り部の方の姿に、平和は祈るだけでなく、伝え続けてこそ守られるのだと感じました。

【第3回事前研修】

ビキニ事件は第五福竜丸の乗組員だけでなく、多くの漁業関係者に深い影響を与えていたにも関わらず、国からの支援は乏しく、差別や偏見から声を上げられなかった「語れないヒバクシャ」がいました。

語られることがなかったあの時のお話を、今、私たちが全ての世代の方々に伝えていくことで、再び同じ過ちを繰り返さない社会へとつなげていきたいと思えます。

【第4回事前研修】

戦時中の展示を見ていると、自分が当時に生きているような気がしました。町中には戦争を賛美するポスターや新聞、そして世間の目。そんな状況で戦争に反対することなど、出来るのでしょうか。

狭くて暗い空間での防空壕体験では、カーテンを開ければ、私達の「体験」は終了します。しかし、実際の戦争には終わりの見えない絶望があったと感じました。

【第5回事前研修】

実際に「今」戦争を経験された方のリアルなお話を伺い、戦災VR体験を行ったことで、自分の戦争に対する解像度が上がったように感じました。

1回目の研修の質問にもあった「私たちだからこそできること」それはこのようにデジタル技術などを用いながら、よりリアルに様々な世代に戦争の記憶、平和の大切さを伝えていくことでもあるのだなと思いました。



【結団式】「受け継ぐ覚悟、つなぐ言葉」

結団式で決意を語ったとき、港区平和青年団の一員としての責任の重みと誇りを強く感じました。

長崎では、目に映る風景や人々の声、一つひとつに心を傾け、全身で平和の意味を受け止めたいです。

そして、自分の中に芽生えた想いを、未来へつなぐ言葉として届けられるよう、真摯に向き合っていきたいと思います。



【活動報告会】「雨上がりの空に誓う」

2泊3日の研修の中で、最も深く心に残ったのは、

8月9日に訪れた長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典です。合唱団「ひまわり」の澄んだ歌声、児童による「クスノキ」の合唱が、会場全体を包み込みました。式典直前まで降り続いた雨は、まるで被爆者の涙のよう。しかし、開始直前にその雨は静かに止み、雲間から青空がのぞくと、平和の鳩が一斉に羽ばたきました。その光景に、困難の中にも必ず希望はあるのだと強く感じました。

事前研修で学んだことを胸に長崎の地を歩くと、「この空の下で年80年前、多くの方が原爆により命を奪われ、水を求めてさまよった」という事実が、足元から迫ってくるようでした。街並みや川の流れに、あの日の記憶と人々の祈りが静かに息づいているのを感じました。

8月8日～9日の青少年ピースフォーラムでは、北海道から沖縄まで全国の同世代と共に平和について学び、語り合いました。異なる背景を持ちながらも同じ想いで結ばれた仲間との出会いは、港区平和青年団の一員としてだけでなく、一人の人間としての私の視野を大きく広げてくれました。

最後に、このような貴重な機会を与えてくださった港区と長崎の関係者の皆様初め、研修を支えてくださった全ての方々に深く感謝いたします。この世界から核兵器を、そして戦争をなくし、平和を実現するために。80年前の夏の悲慘な出来事を二度と繰り返さないために、私は学んだことを語り継ぎ、行動を続けていくことをここに誓います。



鈴木 祐彩

SUZUKI YUA



【第1回事前研修】

東京大空襲について、教科書に載っていないような詳しいことを学ぶことができました。

当時の実態を学ぶことで今後平和青年団としてどのように平和について考えていくべきかが重要だと感じました。実際の空襲被害の写真を見ることには少し抵抗がありましたが、戦争を語り継ぐため、実際に体験した方々の思いを伝えるべきだと考え、写真を見ることができました。

修了生との交流もあり、長崎に行きたいという想いがより一層強くなりました。



【第2回事前研修】

実際に被災した方々から話を聞くことで、前回の研修よりもリアリティを感じました。字面では中々感じとれないような思いがあることを知ることができました。話の中で「実際に体験したことがないのに理解するのは難しい。」とおっしゃっていたのにはっとさせられました。

今まで理解しようとしていましたが、そうではなく「知っていくこと」が大事だと考えました。

今後課題となってしまう可能性があるウクライナやガザ地区の平和について考えていくべきだと感じました。

【第3回事前研修】

第五福竜丸展示館のワークショップにて日本の漁船が「戦後」に被害にあったこと、第五福竜丸事件と呼ぶのではなくビキニ環礁事件と呼ぶことによって、第五福竜丸だけでなくその他の日本の漁船やマーシャル諸島付近の島々に被害があったことについて学ぶことができました。

差別や偏見が多く、被害にあったにも関わらず声をあげることができなかった人たちがいたことにショックを受けました。実際今でも苦しんでいる人がいるかもしれないと考え、被害者とその話を聞いた私たちが少しずつでも事件についての誤解を解かなくてはならないことを改めて感じました。

【第4回事前研修】

昭和館では、戦前から戦後の復興までの人々の状況について学ぶことができました。戦時中は教科書などで印象に残っていたが、特に戦後での戦災孤児などの子どもたちの戦後についてや、食糧不足で闇市など公では認められていない物資を供給するための手段があったこと等、展示を見ているだけで心がいたたまれない気持ちになり、写真で展示されているものよりも想像ができないものだと感じました。また、実際に防空壕の中に入って体験してみると、暗い中狭い場所でギュウギュウになって過ごすのは精神的にストレスがかかってしまうだろうと、当時の戦時中の様子を改めて感じることもできました。



しょうけい館では戦傷病者についてフォーカスして展示されていました。野戦病院の当時の状況について描かれている展示がリアルで怖いと感じましたが、実際の人を見ているようで心が辛かったです。

次回で研修は最後ですが、今回の青年団だけでなく今後の自分に少しでも役に立つような体験だったと考えました。

【第5回事前研修】

戦災 VR を通して最新技術によって実際の民家の様子や爆撃後の跡地が 3D でリアルに映し出されて、まるで現地にいるような角度から体験することができました。実際に現地に行けない人たちやこれからの世代である私たち若者にとって、VR はウクライナだけでなく原爆や戦争での被害を伝えることができるのではないかと考えました。

また、実際に戦地で生活していた避難者と交流したことでニュースでは伝えることのできない体験を学びました。さらにご本人に質問することでよりリアルに感じ、改めて戦争の悲惨さを実感して少しずつ少しでも早く平和に近づけるよう活動していきたいです。



【結団式】「長崎への一歩」

結団式と決意表明を通して、改めて団員の決意を共有することができたと感じました。

応募した理由はそれぞれ違うけれど、平和への想いは変わらないと思いました。長崎に行って多くの同世代の人たちと自分の意見を交換していきたいです。

また、新たな学びを得て自分の知見を深めていきたいと考えました。

【活動報告会】「いつまでもどこまでも」

皆さん突然ですが、私は被爆3世です。祖父の実家が長崎で被爆し、祖父の姉の体験談をよく聞いていました。今回の派遣で初めて長崎に行きましたが、東京とほとんど変わらず、80年前に原爆が落とされたとは思えないほどの街並みでした。港区にない路面電車が有り、興味深かったです。

長崎に行き特に印象に残ったのは、様々な資料館の見学です。教科書では得ることのできない情報や写真がたくさん展示してあり、新たな事実を学ぶことができました。特に国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館では、実際に亡くなられた人の写真を見て、当日までいつも同じように暮らしていたにも関わらず亡くなってしまったと思うと心がとても痛くなりました。幼い子どもからおじいちゃんまで。もし、学校の友だちを亡くしていたら、大事な家族を亡くしていたら。想像もできないし、正気でなくなると思います。たった一発でも悲惨な惨状を後世に残してしまう核兵器をいち早く無くしていきたいと考えました。

戦後80年が経ち、被爆者をはじめ戦争体験者がどんどん減っていきます。私の祖父の姉も今年で95歳になりました。直接聞くことができなくなるのです。今こそ動くべきだと考えます。明日からでは遅いのです。今であるべきです。私は派遣を通して、紛争ジャーナリストという職業に興味を持ち、なりたいと考えました。もちろん生半可な気持ちでできる職業ではありません。しかし、一度の貴重な平和学習で私のように変わる人もいられるかもしれません。それを世界でやったらどうなるでしょうか。ウクライナやガザでの戦争や紛争のニュースで関心を持つ人がいるのなら、きっと彼らは私事のように感じると思います。

I wish there were peace for everyone.



田中 栗太郎

TANAKA KURITARO



【第1回事前研修】

今回の第1回事前研修で、東京大空襲について深く知りました。1945年3月10日、一晩で東京の広い範囲が焼き尽くされ、多くの尊い命や、当たり前にあったはずの日常が一晩で奪われたことに、言葉を失いました。目の前で家族や大切なことを失っても、それでも「自分だけは生きなきゃ」と僕たちならきっとそう感じると思います。そんな気持ちを想像すると、胸が締めつけられました。焼け野原の中で「生きて、あの地獄を誰かに伝えなかった。それだけだった」と聞きますが、自分が生きて未来の私たちにその痛みを伝え残すことが、唯一の願いだったのだと思います。



戦争の残酷さと命の重みが詰まっていると感じました。次の世代に残してくれた写真からは、当時の苦しさや悲しみが静かに、でも確かに伝わってきました。その一つひとつに心から感謝の気持ちが生まれました。3月10日を決して忘れずに語り継ぎ、今の平和が当たり前ではないことを心にとめながら、毎日の小さな幸せをこれからも大切にしていきたいです。

【第2回事前研修】

第2回事前研修で、「港区語り部の会」の方々とお話する中で、実際に戦争を体験された方々の生の声を聞くことができたのは、教科書や映像資料だけでは決して得られない、貴重でかけがえのない経験でした。語り部の方が語ってくださった内容の一つひとつはとても重く、言葉を通して心に深く刻まれました。「生きたい」という気持ちだけで、必死にその場から本能的に逃げていた」という言葉には、複雑な感情と人間らしさすら奪われた現実の重みを感じました。

私はこれまで戦争を知識としてしか理解していませんでしたが、語り部の方の思いに触れることで、歴史や過去を知り、今を大切に生きること、そして平和を守る大切さを語り継ぐ責任を忘れずにいたいです。

【第3回事前研修】

第3回事前研修を通じて、第五福竜丸の事件は、ただ歴史的な出来事ではなく、今の社会にも深く繋がる問題だと感じました。

特に印象に残っているのは、科学技術の発展が倫理とどう向き合うかによって、人間の命が守られるか、逆に脅かされるかが決まってしまうという点です。技術そのものは中立でも、その使い方や背景にある価値観によって結果は大きく変わります。被曝した乗組員の方々が受けた痛みを知ると、命の重さは単なる感情論ではなく、人間の尊厳に関わる根本的な問いだと気づかされました。



そしてもう一つ大事だと思ったのは、こうした記憶をどのように未来へ伝えていくかということです。記憶の継承は、単なる知識の伝達でなく、「倫理的責任」として私たち一人ひとりに委ねられているのだと思います。

忘れてはいけないことを、どうすれば忘れずにいられるのか。そのことを自分なりに考え続けていきたいです。

【第4回事前研修】

昭和館としょうけい館を訪れ、戦争の残酷さと、それに耐えた人々の現実に深い衝撃を受けました。

展示に描かれる生活の困窮、理不尽な動員、心身の傷は教科書には表れない「声なき記憶」です。平和は偶然ではなく、普段の努力によって築かれるべきものだと痛感しました。

同時に、記憶の風化や無関心が次の悲劇を招く危険も感じました。私たちは歴史をただ「かわいそう」と見るのではなく、問い、考え、未来に活かさなければなりません。過去の重みを知ることが、真の平和への一歩です。



【第5回事前研修】

第5回事前研修での活動で、ウクライナから避難してきたオルガさんのお話を聞きました。

あまりに衝撃的で、胸が痛みました。遠い国の戦争だと思っていたことが、目の前の現実として迫ってきて平和の尊さを強く感じました。

【結団式】「学びを行動に変えて」

今回の結団式を経て、長崎派遣の派遣者として気持ちが一層引き締められました。私は原爆の惨状を自分の眼で確かめ、心で受け止めたいと思います。

教科書では分からない現実を現地で見聞きし、学んだ経験を次の世代に伝える責任を自覚しています。平和の尊さを自分の言葉で語れるよう努め、原爆のない世界に向け行動してきます。

【活度報告会】「長崎で学んだ、平和の重み」

今日は、港区平和青年団として参加した長崎派遣研修の報告をします。

被爆地の長崎を訪れて、戦争の悲惨さと平和の大切さを改めて学ぶことができました。原爆資料館では、被爆者の方々体験談を聞き、数字だけでは伝わらない一人ひとりの命の重みを肌で感じました。特に、原爆投下直後の街の様子や、助け合いながら生き抜いた人々の話を聞いたときは、胸が締め付けられるような思いになりました。その声は、過去のことを知るだけでなく、今を生きる私たちに平和を守る責任を強く問いかけてくるようでした。

街を歩くと、復興に尽力した人たちの努力や、平和への願いが込められた場所がたくさんありました。原爆で壊れた建物や慰霊碑を目にしたとき、被害の大きさを実感すると同時に、人々の命を守ろうとした強い思いも感じました。戦争って遠い昔の話ではなく、今の私たちの生活や未来に関わる問題なんだと深く考えさせられました。

今回の研修を通して、戦争の悲惨さを理解すると同時に、平和の大切さを心から感じました。港区平和青年団として、この学びを港区での活動に活かし、周りのみんなにも平和の大切さを伝えていきたいです。戦争の恐ろしさを忘れず、一人ひとりができる形で平和を守る努力を続けていくことが、自分たちの使命だと思います。そして、被爆者の方々の想いを未来につなげていくために、これからも学びを深め、行動していきたいと思っています。



永井 奏和

NAGAI SOWA



【第1回事前研修】

まず、改めて東京大空襲について学んだときに、自分って全然戦争について知らないんだ... と気づかされました。

当時の状況や生活、子どもたちについても初めて知ることが多くありました。でも、それと同時にもっと知りたいなと思ってとても良い機会でした。

みんなとグループになって「自分達ができること」を発表した時、自分のグループも含めて全グループが「SNSを活用する」という案が出たのが中高生らしい良い案だなと思いました。

これからも沢山の人と意見交換してみたいです。



【第2回事前研修】

戦争の恐ろしさを改めて実感しました。そして、「貴方達には想像もできないほど、大変な生活を送っていた。」と聞いた時、本当に世界から戦争がなくなってほしいと思いました。

また、何をかうにも配給制であるということに驚いたし、配給のチケットを持っていようが、ものがなかったので貰えなかったということに、さらに驚きました。

【第3回事前研修】

戦争だけでなく、一方的な爆弾の実験でも犠牲になっている人がいるということを知りました。いつものように漁に出て魚をとっていたら、急に灰が積もってきて、体調が悪くなる。そして、周囲の人からの目にも傷つかなければならない、そんな日々が実際に起きていたことを想像すると、本当にゾッとしました。

それが、自然災害によるものではなく人の手によって行われたというのに悲しく思いました。久保山さんの言葉にあった「原水爆の被害者はわたしを最後にして欲しい」という言葉がすごく心に残っています。残念ながら全然それは達成できていなくて、まだまだ沢山の人が被害に遭っているという状況を少しでも変えていかなければならないと思いました。

【第4回事前研修】

昭和館では戦時中、戦後の生活の厳しさや苦しさ、人々が工夫しながら生き抜いた様子を知り、戦争の影響が日常に深く及んでいたということを改めて実感しました。

しょうけい館では戦傷病者やその家族の苦労や葛藤を学ぶことができ、戦争が終わっても長く続く心身の痛みについて考えさせられました。

2つの施設を通し、平和の大切さと、次世代に語り継ぐ必要があると強く感じました。



【第5回事前研修】

ウクライナの方との交流では、戦争が今も続き、多くの人が生活や家族を奪われている現実を身近に感じました。また、現代ならではのリモートでの教育や情報交換の仕方など工夫も沢山あると知れました。

戦災 VR 体験では、破壊された街の様子がリアルに映し出されていて、より分かりやすく当時を感じることが出来ました。

過去の戦争も現在の戦争も、人々の平和な日常を一瞬で奪ってしまうということを実感し、争いをなくす努力の大切さを考えさせられました。



【結団式】「共に創る、平和の輪」

結団式が終わり、いよいよ平和青年団として最も重要な活動が始まるという実感が湧きました。

一緒に学んでゆく新たな仲間と出会ったことに嬉しさを感じ、これからの学びや経験、考えを共有しながら、成長できるよう努力したいと思います。

【活動報告会】「過去から未来へ届ける平和の願い」

今回の平和学習と長崎派遣を通して、私は戦争の悲惨さ、平和の尊さをこれまで以上に深く考えることが出来ました。長崎では、原爆資料館や平和公園を訪れ、被爆の瞬間を伝える写真や映像、当時の生活用品などを目にしました。それらは、教科書で見るとはるかに生々しく、原爆が人々の命や日常を一瞬で奪った現実を感じさせました。特に被爆者の方の講演では、家族や友人を失った悲しみ、放射線による後遺症の苦しみ。そして「二度と同じことを繰り返してはならない」という切実な思いが語られ、胸が締め付けられました。

また、事前研修では過去の戦争だけでなく、現在も世界各地で紛争が続いている事実について学びました。ウクライナや中東での戦争、多くの人々を故郷から追いやり、平和で幸せな暮らしを奪っています。戦争の悲しみは、決して過去の出来事ではなく、今も形を変えて続いていることを学びました。

派遣を通して私が強く思ったのは、「平和は当たり前なものではない」ということです。多くの人々の努力や願いがあって初めて守られるものだを知り、私たち若い世代が過去の悲劇を風化させないように学び続け、それを周囲に伝える役割があると思います。今回得た学びを学校や地域で共有し、平和について考えるきっかけになればと思っています。

過去から学んだ教訓を今に生かし、そして未来へと繋ぐこと。それが、長崎で受け取った平和の願いに答える方法だと私は信じています。



浜田 華乃

HAMADA KANO



【第1回事前研修】

東京大空襲・戦災資料センターの比江島さんのお話を伺い、主に太平洋戦争下における人々の生活、東京大空襲による被害について学ぶことができました。

私の特に印象的だったのは、まるで「もの」のように積まれた遺体の写真でした。平和の中に人が生きているということは、その人の尊厳を守ることでもあるのだと改めて実感しました。



【第2回事前研修】

今回、「港区語り部の会」の方との交流を通じ、私たちがこうして毎日平和に生きられることは決して当然のことではないのだと改めて実感しました。

語り部の方が「戦争中であっても家族を切り離してはいけない。ウクライナやガザの戦災孤児が心配だ。」とお話されていて、印象に残りました。

戦争がたとえ終わったとしても、失った家族・友人は二度と戻ってこないため、本当に戦争は残酷だと思います。

【第3回事前研修】

都立第五福竜丸展示館を訪れ、核実験による被害の大きさについて改めて認識することができました。

放射線による被害を受けた世界中の方々の展示を見て、核被害または戦争によって苦しむのは、軍人などの当事者に関わらず、一般の人でもあるのだと実感しました。

ゴミ置き場にあった第五福竜丸を守った人がいるように、私も核による被害を伝えていきたいと思いました。

【第4回事前研修】

昭和館では、戦中の食事や服装の展示を見ることで、戦時中の日本人の人々の暮らしについて考えることができました。

しょうけい館では、前線での衛生兵の役割について学ぶことができました。軍人を病やけがから守るためにいるはずの衛生兵の健康さえも伝染病などによって侵されていたと分かり、改めて戦争、特に前線で戦った人たちの悲惨さについて考えさせられました。

【第5回事前研修】

ウクライナからの避難者であるオルガさんのお話を伺い、これまでテレビや新聞でしか知ることのなかったウクライナの現状を、より具体性をもって想像することができました。

日本の環境が合わず、ヨーロッパに帰った避難者もいるというお話を伺い、ただ人を受け入れるのではなく、その後のケアも重要なのだと実感しました。



【結団式】「様々な考え方を知る」

清家区長から長崎派遣決定書をいただき、長崎での様々なプログラムに全力で向き合おうと改めて思いました。

現地では、青少年ピースフォーラムなどを通して、全国から集まった同世代の人との意見交換を通じ、自分なりに平和についての考えを深めたいです。



【活動報告会】「長崎派遣を終えて～他者を想像すること～」

長崎派遣前、戦後80年という節目の年に平和祈念式典に参列し、現地での様々なプログラムを通して平和について学べる機会に感謝する一方、戦争を肌で感じたことのない私が、到底私たちの想像が及ばないであろう体験をされた被爆者の方々のお話を伺い第三者に伝えていくということが、失礼なのではないかと不安に思っていました。しかし、青少年ピースフォーラムで被爆者である三瀬清一郎さんの講話や原爆資料館の思わず目を背けたくなるような展示を通して、戦争について周囲に伝えていくという行為は戦争の悲惨さや当事者の思いに耳を傾けた私たちの責任であると感じるようになりました。

三瀬さんは夏休み明け、学校にいくと級友の数名が原爆によって亡くなっていたとお話しされており、現代に生きる私の感覚では受け入れ難いものでした。私は半ば無意識的に明日が来るということを当然のことのように思っていますが、決して日々大切な人に囲まれて幸せな毎日を送っていることは当たり前ではないのだと改めて実感しました。

私が長崎派遣を通じて、最も大切だと感じたことは想像することです。相手を自分のことのように思い、その気持ちを想像することで、争いごとは減るのではないのでしょうか。そのためには、青少年ピースフォーラムなどの様々な人との意見交換の場が重要だと思いました。平和な毎日を送る私たちにとって、過去や現在の戦争から目を背ける事は簡単です。しかし、少しでも平和な世の中を作り、幸せな人を増やすために現実から目を背けず、向き合っていきたいです。



三塚 小羽芽

MITSUZUKA KOUME



【第1回事前研修】

自分の身のまわりに目を向けることの大切さを感じました。平和青年団38期生の方々の貴重なお話を聞き、私たちの住む港区で過去に受けた空襲による被害について学びました。

そして、実際に港区にある平和史跡を見学することによって、自分が普段意識していない所にも戦争の名残があり、戦争というものの脅威をより身近に感じました。そのため、自分の身のまわりに目を向けながら戦争についての知識を身につけていこうと考えました。



【第2回事前研修】

年長者の方々の話を積極的に聞くことが大切だと改めて思いました。実際に戦争を体験した人の話から、数えきれないほどのたくさんの人が犠牲になったことが分かり、戦争がとても無残なものであったことをより感じました。

また、今生きていることへの感謝を覚えました。港区語り部の会の皆さまからお話を聞いたのは本当に貴重な経験だったので、交流会で得た知識を身の周りの人とたくさん共有していこうと思いました。

【第3回事前研修】

実際に水爆の被害を受けた第五福竜丸を目の当たりにして、所々船の表面が爛れてしまっているのを見て、原爆の悲惨さを痛感しました。

また、絵本コーナーに展示されている第五福竜丸が受けた水爆の被害を元に作られた「トビウオのぼうやはびょうきです」という絵本を読み、救いようのない結末や、人だけでなく魚が受けた被害を想像すると、とても辛い気持ちになりました。

実物の第五福竜丸を見ることができて、とても良い経験になりました。

【第4回事前研修】

このような戦争の歴史を伝える建物に行くことが、より一般的になればいいなと感じました。昭和館もしょうけい館も入口から出口に向かうにつれて戦況や人々の生活環境が悪くなっていく構造になっていて、まるで実際に戦争を体験しているかのような気持ちになりました。

そのため、学校の校外学習などで、このような建物に行くことがもっと一般的になって、みんなが戦争について関心を持つことができればいいなと考えました。



【第5回事前研修】

戦争と技術の進化の関係について考えました。今実際に戦時中の方の話を聞いて、「戦争をしたくない」と世

界中の人が思っていることを改めて感じました。また、VR体験などをして、ほとんど実物と変わらないような映像を見ると、技術がとても進化していることが分かりました。

このように手に入れた技術は、戦争など人を傷つけるために使うのではなく、世界中の人のことを考えた使い方をすべきだと思いました。

【結団式】「肌で感じる“ナガサキ”」

結団式を終えて、長崎県に行く実感が湧くと共に、初めての場所へ行く不安も少し芽生えましたが、ここまでで得た知識や、一緒に研修をする仲間が側に居てくれたので、とても心強く感じました。

事前研修で様々な場所や人から教えてもらった考え方や知識を活かし、一分一秒を真剣に大切に過ごします。

【活動報告会】「ナガサキ」を伝える」

私たち平和青年団は長崎県に行き、原子爆弾の脅威について詳しく学ぶことができました。初日には、長崎県の高校生平和大使の方々と交流し、長崎県が行っている平和学習について詳しく教えてもらいました。また青少年ピースフォーラムでは、被爆者である三瀬清一郎さんのお話で沢山の人が三瀬さんの目の前で亡くなったこと、学校に行けば友達がいなくなっていたこと、戦争後も食糧に困ったり、被爆者に対する差別を受けたことなどを教えてくださり、私たちが想像もできないような苦しく悲しい日々を過ごしたことを痛感しました。

二日目は平和祈念式典に参列し、その後原爆資料館に行きました。平和祈念式典では、長崎市長の力強い「長崎平和宣言」を聞き、どうか世界中の全ての人に平和を願う気持ちが届き、命を奪う行動を、核兵器をいち早くなくして欲しいと強く思いました。また原爆資料館では、写真やイラストなどの展示品で無残な姿となった街や人々を知ることができました。原爆資料館で見た、残酷で無慈悲な展示品の数々は今後も強く私の心の中に残り続けるだろうと思います。三日目では、被爆者の方から説明を受けながら被爆建造物を回りました。沢山の方が亡くなった地の上に立ち、歩いていることを自覚すると、戦争によって亡くなった方々がいつか幸せな日々を送って欲しいと祈るばかりでした。

事前研修や長崎派遣研修の三日間を通して、私の平和に対する願いはより大きく、強くなりました。また、私たち若い世代が戦争を体験された方々のお話を積極的に聞き、戦争の悲惨さを伝えることが大切だと考えました。そのため、これからも今回の研修で自分の中に浮かんだ沢山の思いを身の回りの人から世界中の人々に、あの日長崎県で起きたことを未来に繋ぐ平和の架け橋として伝えていこうと思います。



山下 芳佳

YAMASHITA YOSHIKA



【第1回事前研修】

戦争は例えではなく、本当に地獄なのだと思います。東京大空襲では、木造の建物が燃えるように、人々を殺すために計算し尽くされていたと知ったときは、街が火の海になっていたことがより現実的に感じました。

また、空襲から逃れようと建物に逃げ込んだ人も蒸し焼かれるようにして亡くなってしまったと聞いたときは、そのときの絶望がどれほどであったのか想像し、拷問のようであったのかなと感じました。

やはり戦争を実感するには、学校で歴史として学ぶ戦争だけではなく、もっと突き詰めて知っていく必要があると思いました。



【第2回事前研修】

私は、「食事・日常生活」についてお話をきいたのですが、今では考えられないような生活だなと素直に思いました。

教育も情報も、当時は「日本が一番だ」「日本は神の国だ」ということがベースであり、もし戦争に対して「つらい」と口に出してしまうと、それだけで警察に捕まってしまうときいたときは、自由などほとんどなかったのだと強く感じさせられました。

しかし、戦後の米兵の方とのやり取りをきくと、実に平和なもので、戦争は人の命だけではなく「他者とコミュニケーションをとる」という人間らしい要素も壊してしまうのだなと思いました。

【第3回事前研修】

ビキニ環礁の水爆実験のような、戦争ではなく人を殺すための道具を進化させるために人生を狂わされた人が、第五福竜丸だけではなく、数えきれないほどいることに驚きました。

また、戦争に関係のなかったビキニ環礁に住んでいた人々が、命に危険がある実験が行われているとは知らずに、どんどん体が蝕まれていったと聞いたときには、怒りを感じてしまいました。

【第4回事前研修】

今回は、「昭和館」と「しょうけい館」という2つの施設へ行き、戦前から戦時中、そして戦後の人々の様子を、その当時実際に使われていたものを通して学びました。そして、今私が生きている日本はなんて恵まれているのだろうと感じました。

昔は、手紙を家族に送るときも検閲され、本当の気持ちを伝えることができなかつたり、小麦粉を水に溶かし、少しの具材が入ったものをシチューと呼んだり、熱に苦しめるのに薬がなかつたりと、今では考えられないような縛られてばかりの生活でした。

それらは全て戦争のための縛りであったため、もし戦争が起きていなければどんな生活をしていたのかを考えると、どうしようもない複雑な気持ちになってしまいます。



【結団式】「平和青年団員として」

結団式では、団員の派遣に対する強い思いを知ることができ、私自身の身が引き締まるのと同時に、団員への尊敬の念を抱きました。

また、区長からは今年で「戦後80年」であり、また「港区平和都市宣言40周年」であるお話と、区長ご自身が昔戦争の遺物を見て回った体験についてお話をいただき、長崎に行く実感をもつことができました。

しかし、長崎に派遣されて行くのだという実感と、団員の思いを知ったことで、はじめは良い経験になるだろうという考えで参加した自分に不安を感じてしまうこともありました。そこから、「団員として選ばれたからには自分にできること、自分にしかできないことを精いっぱいやろう」と思い直しました。私だからこそできることがあると信じ、一生懸命に臨んでいきます。



【活動報告会】「違いを認め、平和を繋ぐ」

このたび、長崎での貴重な平和青年団活動に参加させていただき、心から感謝申し上げます。全国各地から集まった青少年と共に、緊張と期待の入り混じる中、青少年ピースフォーラムで『「違い」ってなんだろう？』をテーマに話し合いました。参加して驚いたのは、思っていた以上に若者が平和に対して関心を寄せていたことです。多くの同世代が真剣に考え、話を聞き、自分だけでなく相手の意見についても話し合う姿を見て、とても嬉しく、また心強く感じました。

話し合いの中で、「違い」が対立の原因となることがある一方、「違い」を認め合い、適材適所で活かしていけば、協力し合う力となることに気づきました。文化や思想、得意分野の違いは、平和で理想的な世界を実現するための、大切な材料やきっかけとなるのです。

戦争も、民族、宗教、価値観などの違いが、排他的な活動や支配を正当化する理由として利用された結果でした。これは、「違い」をどう扱うかが平和の鍵であることを示していると思います。現在、平和のために努力をしている人々はたくさんいます。昨年末、日本原水爆被害者団体協議会がノーベル平和賞を受賞したことも、その証です。そうした人々の思いや行動に応えるためにも、私たちは戦争について学び、その惨状を忘れず、平和の大切さとともに未来へ語り継いでいかなければなりません。





知り・語り継ぐ

石平 暖佳

「語り継ぐこと」これは中学校の修学旅行で広島を訪れた際に心に誓ったことです。広島でも、長崎でも、東京でも、多くの方が私たちに戦争や平和について語り継いでくれています。

高校生平和大使の方との交流で、写真を見るだけでなく、その写真の背景や当時の状況も知って欲しいと言われました。それを他の人に伝えるには、私自身が知ることが必要です。身につけた知識を自分で終わらせるのではなく、多くの人に伝える「語り継ぐこと」を未来に繋げていきたいです。



変わらぬいつも通りの朝を迎えられる幸せ

市橋 真直

「平和」という言葉には、人それぞれの捉え方があると思いますが、私が平和と思うときは、何気ない日々を過ごせることです。

朝ちゃんと起きて朝が迎えられ、それを平和だと思います。長崎に行って、被爆者の碑を見ながら、そう思いました。



多文化が奏でる 平和なハーモニー

内山 葵

幼少期から多くの外国にルーツを持つ友達との交流を通じて異文化への共感と国際理解を深めてきました。

この体験を活かし、誰もが理解し合い、心が繋がる平和な場を作りたいです。

同じ空を見上げて

稲井 琉楓

平和は当たり前にあるものではない。守り続けているからこそ平和はある。誰もが笑顔で過ごせる、人と人が繋がる世界にしたい。

そのためには、一人一人が違いを認め合う心を持つことが必要だ。対立したら、戦争をするのではなく、話し合った方が誰も犠牲にならずに済む。そして空を見上げた時、平和だと世界中の人が思えるような世界になってほしい。



長崎平和記念像 — ポーズに込められた祈りと力 — 運天 美月

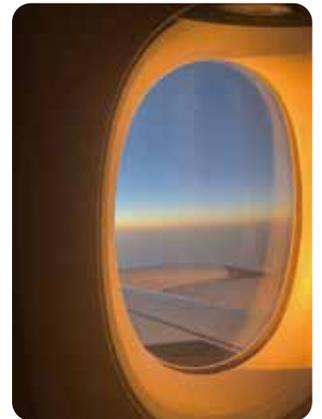
普段は、教科書やネットでしか見れなかった長崎平和記念像。実際に見て最初に感じたことは、「動かないはずの像が語りかけてくる」ように感じました。詳しく調べてみると、制作者は「北村 西望」さん。右手は原爆の脅威・左手は平和への願い・静かに閉じた瞳は原爆犠牲者への追悼・足元は戦争と平和の狭間に立つ人類の姿を象徴しています、私は、右手で原爆の脅威を示し、左手で平和を願う。その非対称のポーズが、戦争と平和という人類の二面性を表していると気づいた時、鳥肌が立ちました。両腕の動きに込められたメッセージ性の強さは、言葉はなくても、強いメッセージを放っていました。

また、足元は立ち上がるようにして、「いつでも行動できる」という意志を感じます。この像を見て、私の中で想う原爆の脅威・平和の意識が今以上に大きく変わりました。



私が繋げたいもの・こと 金生ベカ 美愛

グローバル化が進む中、ミックスとして多様な文化や環境を行き来してきた経験から、国籍・文化・言語の壁を越えて互いを認め合い、自分の中心や信念だけにとらわれずにリスペクトし合う姿勢につなげていきたい。



青い空

岸 凛佳

毎日、雨が降ったり空が紫のような色に染まったり……。そんな空を毎日見ることができるのも、今は空から爆弾が落ちては来ないし、敵国の飛行機が飛んでいたりしないからです。

平和の象徴である、鳩も青い空を悠々と飛べるのは、空に危険が何もないからです。

「私が今日も空を見上げられるということは、今日も平和な一日を送れた。」そんな象徴の青い空をこれからも私は守っていきたい。



語り継ぐ平和のバトン

木ノ原 もも

体験を語り継ぐ被爆者が減ってきている中、平和の尊さや命の重みを次世代へ紡ぐことは、この時代に生きる私たちの責任です。

長崎で感じた祈りと希望を胸に、学びを行動へと変え、戦争も核兵器もない未来を築いていきます。



小さなことから

鈴木 祐彩

小さなことの積み重ねでいずれ大きくなる。私はこのことを長崎で改めて感じました。昨年日本被団協がノーベル平和賞を受賞し、世界に原爆や原水爆のことについて広まった一歩だと感じました。

差別や偏見に苦しみながらも小さなことを少しずつ取り組んでいる彼らを見て、取り組んで無駄なことはないんだと考えることができました。



天まで伸びる、平和の願い

田中 栗太郎

この塔から放たれた雲の筋が、世界の悲しみを全部消してくれますように。

国境も争いも飛び越えて、僕らは同じ空の下で繋がっている。

この一筋の雲を、ずっと続く平和への道標にしたい。

繋ぐ平和の架け橋を

永井 奏和

平和青年団の活動を通して、戦争の悲惨さと平和の尊さを深く学びました。被爆者の証言や資料から、平和は多くの犠牲の上に成り立っているということを実感しました。

学んだことを沢山の人に伝え、未来へと平和の架け橋をつなぐ役割を果たしたいと思いました。





大切な人と一緒にいること

浜田 華乃

1日目の青少年ピースフォーラムでの平和体験企画を通して、大切な人と日々を過ごすことは決して当たり前のことではなく、かけがえのないことなのだと実感しました。

多くの人が毎日に感謝するような世界が実現すればと思っています。



出逢いを愛する

三塚 小羽芽

活動を終えて、「出逢い」を大切にしようと思いました。

辛い戦争を越え、命を繋いでくれた家族たちや、良い影響を与えてくれる研修の中で出逢った仲間たちとの関係を大切にして、一つ一つの出逢いに感謝していくことに繋がりたいです。



私が繋げたい〇〇

山下 芳佳

新鮮で美味しいご飯を食べることができる環境を繋げていきたいです。

美味しいご飯は元気の源！

ちなみにこの写真は長崎で食べた海鮮丼の写真です、とても美味しかった・・・。



みんなと結ぶ Happy&Peace (ハッピーズ)

○日時：令和8年2月11日（水・祝）

○場所：東京インターナショナルスクール

港区平和青年団有志と東京インターナショナルスクールの学生で交流会を実施しました。

「平和を実現するには何が必要か」「若い世代に何ができるか」について考え、互いに発表し合いました。

青年団が考えたアイスブレイク、お互いのプレゼンテーションを通して交流を深めることができました。

<自己紹介・アイスブレイク>

お互いの自己紹介の後、青年団が考えたうそつき自己紹介を行いました。

英語で伝える難しさもありましたが、緊張が解け、互いに楽しく話すことができました。



<港区平和青年団の発表>

平和青年団は2グループに分かれて発表を行いました。

一方のグループは個人の物事の捉え方や伝えることにフォーカスしていて、もう一方のグループは対話や協力など、人間同士の関わり方に着目していました。

平和を実現するには互いの違いを理解するという意見がどちらにも共通していて、共生しようとする姿勢や、互いの考えを議論する場の大切さを改めて感じました。

これらを踏まえて、署名活動や人に伝える機会を作るなど、若者の強みを生かした主張ができました。



<国際ナショナルスクールの学生の発表>

国際ナショナルスクールの皆さんは3班に分かれて発表を行いました。
互いの文化に敬意を払うことや、互いのことを知るなど国際的なルーツを持つ学生としての意見をもらえました。



<交流会を通じて感じたこと>

- ・交流を通して、自分たちの学びだけでは得られなかった視点や考え方をもらうことができました。若者の意見は尊重されにくいという問題について、時間や努力、数、チームワークで埋めるという意見を聞き、これからの自分の行動に活かしたいと思いました。
- ・多方面から平和の実現について考えていて、貿易によりどの国も独立していない国際社会で、国同士の支えあいが必要なのだと改めて実感しました。資源の開発と人権の侵害について考えている班があり、自分なりの考えを深めることができました。
- ・自分たちの発表について、国際ナショナルの学生から質問をもらい、これまで気づかなかった考え方を共有することができました。特に現在の日本社会において平和の障害になっているものは何だと思うか質問されたのが印象に残っています。対処する方法や私たちに何ができるかを改めて考え直したいと思いました。
- ・国際ナショナルスクールの方々と交流して、様々な国の文化や視点で平和を捉えることができ、自分自身の成長に繋がりました。
- ・いろいろな視点や考え方があって新しい発見になりました。自分は、平和は自然にできるものではなく、一人ひとりが意識して『作るもの』なのだと強く実感しました。



東京国際ナショナルスクールのみなさん
ありがとうございました。

港区平和青年団派遣先及び派遣人数

昭和60年（1985年）8月15日		港区平和都市宣言
年 度	派遣先（日程）	派遣人数
昭和61年（1986年）	広島市（8月5日～7日）	18
昭和62年（1987年）		18
昭和63年（1988年）		17
平成元年（1989年）		13
平成2年（1990年）	広島市（8月4日～6日）	12
平成3年（1991年）		12
平成4年（1992年）	長崎市（8月23日～24日） ※台風のため日程変更	9
平成5年（1993年）	長崎市（8月7日～9日）	12
平成6年（1994年）		12
平成7年（1995年）	広島市（8月5日～7日）	7
	長崎市（8月8日～10日）	7
平成8年（1996年）	長崎市（8月8日～10日）	9
平成9年（1997年）		9
平成10年（1998年）		8
平成11年（1999年）		8
平成12年（2000年）		8
平成13年（2001年）		8
平成14年（2002年）		8
平成15年（2003年）	長崎市（8月7日～9日）	8
平成16年（2004年）	長崎市（8月8日～10日）	8
平成17年（2005年）		9
平成18年（2006年）		6
平成19年（2007年）		6
平成20年（2008年）		3
平成21年（2009年）	長崎市（8月7日～10日）	7
平成22年（2010年）		9
平成23年（2011年）	長崎市（8月8日～10日）	9
平成24年（2012年）		9
平成25年（2013年）		5
平成26年（2014年）		8
平成27年（2015年）		8
平成28年（2016年）		8
平成29年（2017年）		8
平成30年（2018年）		5
令和元年（2019年）		7
令和3年（2021年）		区内施設にてオンライン参加(8月8日、9日)
令和4年（2022年）	長崎市（8月8日～10日）	9
令和5年（2023年）	区内で代替事業実施（8月9日）	12
令和6年（2024年）	長崎市（8月8日～10日）	15
令和7年（2025年）	長崎市（8月8日～10日）	15

派遣人数には団長を含みます。

令和2年（2020年）は新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、事業を中止しました。

令和5年（2023年）は台風の影響により、長崎派遣を中止しました。

令和7年8月9日
August 9, 2025



被爆80周年 長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典

The 80th Nagasaki Peace Ceremony



式次第		Program
被爆者合唱	10:40	Chorus by A-bomb Survivors
開式	10:45	Commencement
原爆死没者名奉安	10:46	Laying to rest of the list of victims who died during the past year
式辞	10:48	Opening Address
献水	10:52	Water offering
献花	10:54	Flower offering
黙とう	11:02	Silent prayer
長崎平和宣言	11:03	Nagasaki Peace Declaration
平和への誓い	11:12	Pledge for Peace
児童合唱	11:19	Children's chorus
来賓挨拶	11:24	Addresses
合唱 千羽鶴	11:40	Chorus "A Thousand Paper Cranes"
閉式	11:45	Closing words



目次

会場案内図……………	1 ページ	平和への誓い……………	9～10 ページ
被爆者合唱……………	2	児童合唱……………	11
司会者名・献水の採水場所……	2	千羽鶴（歌）……………	12
原爆死没者名簿登載者数…………	2	長崎市民平和憲章……………	13～14
式辞……………	3～4	長崎平和宣言<ことばの解説>…	15～18
長崎平和宣言……………	5～8	平和祈念式典会場周辺図……	19

長崎市

City of Nagasaki



被爆80周年特設サイト

長崎平和宣言

1945年8月9日、このまちに原子爆弾が投下されました。あの日から80年を迎える今、こんな世界になってしまふと、誰が想像したのでしょうか。

「武力には武力を」の争いを今すぐやめてください。対立と分断の悪循環で、各地で紛争が激化しています。このままでは、核戦争に突き進んでしまう。そんな人類存亡の危機が、地球で暮らす私たち一人ひとりに、差し迫っているのです。

1982年、国連本部で被爆者として初めて演説した故・山口仙二さんは、当時の惨状をこう語っています

「私の周りには目の玉が飛び出したり 木ギレやガラスがつきさきった人、首が半分切れた赤ん坊を抱きしめ泣き狂っている若いお母さん 右にも 左にも 石ころのように死体がころがっていました。」

そして、演説の最後に、自らの傷をさらけ出しながら、世界に向けて力強く訴えました。

「私の顔や手をよく見てください。世界の人々 そしてこれから生まれてくる子供たちに私たち被爆者のような核兵器による死と苦しみを 例え一人たりとも許してはならないのであります。」

「ノー・モア・ヒロシマ ノー・モア・ナガサキ

ノー・モア・ウォー ノー・モア・ヒバクシャ」

この心の底からの叫びは、被爆者の思いの結晶そのものです。

証言の力で世界を動かしてきた、被爆者たちの揺るがぬ信念、そして、その行動が評価され、昨年、日本被団協がノーベル平和賞を受賞しました。日本被団協が結成されたのは、1956年。心と体に深い傷を負い、差別や困窮にもがき苦しむ中、「自らを救うとともに、私たちの体験をとおして人類の危機を救おう」という結成宣言をもって、長崎で立ち上がりました。

「人類は核兵器をなくすことができる」。強い希望を胸に、声を上げ続けた被爆者の姿に、多くの市民が共感し、やがて長崎に「地球市民」という言葉が根付きました。この言葉には、人種や国境などの垣根を越え、地球という大きな一つのまちの住民として、ともに平和な未来を築いていこうという思いが込められています。

この「地球市民」の視点こそ、分断された世界をつなぎ直す原動力となるのではないのでしょうか。

地球市民である、世界中の皆さん。

たとえ一人ひとりの力は小さくとも、それが結集すれば、未来を切り拓く大きな力になります。被爆者は、行動でそう示してきました。

はじめの一步は、相手を知ることです。対話や交流を重ね、互いに理解し、小さな信頼を重ねていく。これは、私たち市民社会の大きな役割です。私たちには、世界共通の言語ともいえるスポーツや芸術を通じて、また、発達した通信手段を使って、地球規模で交流する機会が広がっています。

今、長崎で、世界約8,500都市から成る平和首長会議の総会を開いています。市民に最も身近な政府である自治体も絆を深め、連帯の輪を広げています。地球市民として、共感と信頼を積み重ね、平和をつくる力に変えていきましょう。

地球市民の一員である、すべての国の指導者の皆さん。

今年は、「戦争の惨禍を繰り返さない」という決意のもと、国連が創設されてから80年の節目でもあります。今こそ、その礎である国連憲章の理念に立ち返り、多国間主義や法の支配を取り戻してください。

来年開催される核兵器不拡散条約（NPT）再検討会議は、人類の命運を左右する正念場を迎えます。長崎を最後の被爆地とするためには、核兵器廃絶を実現する具体的な道筋を示すことが不可欠です。先延ばしは、もはや許されません。

唯一の戦争被爆国である日本政府に訴えます。

憲法の平和の理念と非核三原則を堅持し、一日も早く⑩核兵器禁止条約へ署名・批准してください。そのためにも、北東アジア非核兵器地帯構想などを通じて、核抑止に頼らない安全保障政策への転換に向け、リーダーシップを発揮してください。

平均年齢が86歳を超えた被爆者に、残された時間は多くありません。被爆者の援護のさらなる充実と、未だ被爆者として認められていない被爆体験者の一刻も早い救済を強く要請します。

原子爆弾で亡くなられた方々とすべての戦争犠牲者に、心から哀悼の誠を捧げます。

被爆80年にあたり、長崎の使命として、世界中で受け継ぐべき人類共通の遺産である被爆の記憶を国内外に伝え続ける決意です。永遠に「長崎を最後の被爆地に」するために、地球市民の皆さんと手を携え、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に力を尽くしていくことをここに宣言します。

2025年（令和7年）8月9日

長崎市長 鈴木史朗

港区平和都市宣言

かけがえのない美しい地球を守り、世界の恒久平和を願う人びとの心は一つであり、いつまでも変わることはありません。

私たちも真の平和を望みながら、文化や伝統を守り、生きがいに満ちたまちづくりに努めています。

このふれあいのある郷土、美しい大地をこれから生まれ育つ子どもたちに伝えることは私たちの務めです。

私たちは、我が国が『非核三原則』を堅持することを求めるとともに、ここに広く核兵器の廃絶を訴え、心から平和の願いをこめて港区が平和都市であることを宣言します。

昭和60年8月15日

港 区

区の木



ハナミスキ

区の花



アジサイ



バラ

発行番号 2025161-6421

令和7年度 港区平和青年団活動報告書

忘れない。その約束を未来へ

発行年月日：令和8年（2026年）2月

編集：港区平和青年団

発行：港区総務部人権・男女平等参画担当

〒105-8511 港区芝公園 1-5-25

☎ 03-3578-2111（内線）2014



港区は、みどりの保全とごみの減量に努めています。
この「港区平和青年団活動報告書」は古紙を活用した再生紙を使用しています。



未来へ届け、
私たちの
平和への想い。



令和7年度 港区平和青年団 活動報告書
忘れない。その約束を未来へ